

死でつなげる命

北海道教育大学附属旭川中学校 三年 成田 咲良

先日合宿に行った際、保険証を持っていった。自分の保険証をまじまじと見るのは初めてだった。その裏には臓器提供の意思表示の欄があった。二〇〇九年から十五歳未満の臓器提供も可能になった。つまり私は今できる。私は考えた。臓器提供をするかしないか。そもそも臓器提供とはドナー（提供者）からレシピエント（受給者）に組織や臓器を移し植える医療行為のことで、保険証の意思表示のものは脳死後あるいは心臓が停止した死後に臓器を提供することを指している。自分が死んだとき、自分の臓器で他の人の命を救うことができるというものだが、個人の死生観の違いから賛否が分かれる。私はこれに複雑な感情を抱いてしまう。それには個人の脳死のとらえ方が根幹となっていると考える。

私は考えた。もし私が脳死になったら、私は提供するだろうか。自分が臓器を提供することによって、最大十一人もの人を救うことができるのならする。

私は考えた。もし家族が脳死になってしまったら。これは自分が脳死するのとは違って難しい。例えば、臓器を提供することによってレシピエントの中で家族が生き続けるという考え方と、人工呼吸器を付け続け側に居続ける、つまり臓器提供をしないという考え方の二つがあるが、私は後者寄りだ。私が脳死になれば臓器提供をしてよくて、家族には臓器提供をせずずっと一緒に居て欲しいというのは完全な私のエゴである。それは、レシピエントが家族の臓器によって回復したときに罪を犯したら。ドナー家族にはレシピエントが誰なのかを知ることができないが、自分の家族によって助かった人が罪を犯すのは家族が罪を犯してしまうのと同義なのではないか。犯罪歴があるような人に臓器を提供されるのではないかと考えると不安になる。また、臓器を提供したけれども、手術が失敗あるいはその後すぐレシピエントが亡くなってしまったとしたら。脳死していて動かなくても人工呼吸器をつけていれば心臓が動いており、肌にくもりがある人の命綱をとってまで臓器を提供する必要があったのか。そして、これは臓器提供以前の話だが、家族が危ない状態に陥り、家族が臓器提供をするという意味表示をしていた場合、十分な医療行為はされるのか、臓器目当てで治療を疎かにされないか。私はいい。死んでいるの

だから。死んでしまったら何も感じないのだから。でも家族は違う。もちろん家族の臓器によって幸せになれる人がいたらうれしい。それでも違うのは家族をととても大切に思っているからである。

私は考えた。私がレシピエントだったら。臓器が提供されるのは運であり、平均して臓器を待つ期間は三年。迫ってくる寿命に怯え、強く生きたいと感じると思う。そして、誰かの死を望んでしまうのではないだろうか。そうなってしまったら臓器提供の意義はどうなるのか。

日本での臓器提供待機者数は約一万三千人。そのうち臓器を提供される人は三百人ほど。脳死のとらえ方は人それぞれだが、日本の文化における考え方がドナーの人数が少ない原因になっていると考えられる。日本の「昔からどんな物にも魂が宿っている」という考え方から脳を死をとらえにくいのだと思う。

脳死と臓器提供。ドナーとドナー家族、レシピエントの三方向からの視点で考えることによってとらえ方は変わってくる。私が思うにこれは人の死によって命を救うものである。単純のようで複雑なものこそ、さまざまな立場の人々と話し合っていくかなくてはならない。